書評

永井三明著『ヴェネツィア貴族の世界——社会と意識』

田中俊之
藤内哲也

一

本書は、中・近世イタリア史の第一人者である著者永井三明氏が、心血を注いでこられたヴェネツィア史、とりわけヴェネツィア貴族の問題について、ここ十余年の間に発表された諸論文や未発表の論考を中心にまとめられた研究書である。従来、ヴェネツィア史を研究する場合、主として海外貿易や国内産業などの経済的側面および政治的・制度的側面にスポットを当てるのが常であったと思われるが、本書はそうではなく、ヴェネツィア共和国を動かした原動力を探るべく、ヴェネツィア貴族を考察の中心に据え、背景をなす社会への影響または社会からの影響、それに伴う貴族の意識の変転といった点から、特に思想史的・文化史的側面に重点を置いてアプローチを試みているところに特色がある。

「はしがき」にも述べられているように、ヴェネツィア共和国は他のいかなる国家・都市とも違い、内紛・革命を体験することなく、同一政体のもとで千百年にわたって平穏・静謐の歴史を展開することができた。それは一つには、きめ細かな政治的配慮等の様々な要因により、社会階級の相互の関係が概ね安定していたからである。すなわち、ヴェネツィアでは他の国家・都市に数多く見られるような貴族＝市民間の階級闘争もなく、また下層民の反乱も、それを煽動する動きも起こらなかった。かかる状況に鑑みた場合、著者がそれらの原動力を探る手段として、貴族階級に焦点を当てて、しかもその意識の推移を主に思想史的・文化史的領域に分け入って解明しようとしたことは、研究の視角、問題の設定においてすでに正当な選択であったと評価できるであろう。それは、ヴェネツィアの場合とは違って、内紛・闘争・反乱の頻発したアルプス以北の都市史において、誰が政治的・経済的主導権を担ったかという点をとりあえずの切り口とせざるをえず、したがって政治・経済構造の変遷とそれに付随する問題を核とする、時に単線的な都市論が展開されてきた状況と比較したときに歴然とする。また本書では、思想史・文化史の領域に踏み込んだ結果、「人文主義歴史観から近代的歴史観への展開」という、ヴェネツィア史に取り組む上で著者が強く関心を抱いていた問題にも触れることになったということを忘れてはならない。このことは、本書が貴族というものを直接の考察対象としながら、同時に歴史観という壮大な問題をも射程に収めようとしていることを示しているのであり、本書の存在意義を高めている。

それでは以下、本書に収められた七つの章の概要を簡単に紹介し、次いで本書全体を見渡した読後感を述べてみることにしたい。

二

第一章「ヴェネツィア貴族階級の確立と意識の変化」では、ヴェネツィア共和国の支配階級として独占的排他的特権を行使した貴族階級がいかに成立し、またその背景をなしたものは何であったのかについて論じられている。ヴェネツィア貴族階級の成立は、これまで、一二九七年のセッラータとよばれる、大議会の議員資格の特定の家系への凍結とその世襲化に帰せられ、これによって市民階級が排除されたと解釈されてきた。しかしながら著者は、このセッラータの性格を市民階級の排除ではなく、逆に有力で協力的な市民の貴族階級への包摂であると規定し、さらにその背景にはジェノヴァとの戦争があったことを指摘する。すなわち、ジェノヴァとの戦いを進めるうえで、ヴェネツィア貴族階級は、市民階級の一部を自己の中に取り込むことによって貴族階級の拡充を図るとともに、市民の国家への献身を期待したのであり、この点に注目すれば、一三八一年の新貴族の加入も例外的な措置ではなく、セッラータの継続であると考えられるのである。ではヴェネツィア貴族階級の確立はどの時点で達成されるのか。著者は、セッラータにおける市民階級の包容作用が拒否された時点、すなわち一五世紀初頭にそれをみる。そしてそれは、一四世紀を通じての貴族階級の意識における保守化と排他性の増大によってもたらされたものであった。このように、セッラータの性格と貴族階級の確立についての新しい解釈を提示したことは、本書のもっとも大きな意義のひとつであるといえよう。ただ、セッラータ以前の「貴族」と、市民の一部を取り込み、最終的に排他性を確立した「貴族階級」との関係がやや曖昧であり、もう少し説明が欲しいところであるが、この点については後述する。

第二章から第六章までは、ヴェネツィアにおける貴族階級と文化とのかかわりについて述べられている。第二章「ヴェネツィア人文主義と貴族階級—バルバロ家の二人—」では、ヴェネツィアの人文主義をとりあげるには、職業的人文主義者ではなく、彼らを呼び寄せ、また自ら人文主義著作を著したヴェネツィア貴族グループに焦点を合わせることが肝要であるとしたうえで、ヴェネツィア人文主義の特色はアマチュアリズムと全員一致の理想であったと規定する。商業活動や政治活動に忙しいヴェネツィア貴族は、人文主義研究に専念することは不可能であったし、また貴族にとって学問は、道徳と結びつくことで家門や階級・国家への奉仕と責任を説く手段となり、支配階級にとって有用な思想を提供したのである。このことは、フランチェスコ・バルバロの『結婚論』に典型的に現れている。彼にとって結婚とは、共和国の要職を担うべき子孫をもうける手段にすぎず、しかも貴族家系同士での結婚ということが重要であった。そしてこの考え方は、貴族階級において広く共有されていたのである。ところが、フランチェスコの孫、エルモラーオ・バルバロの『独身論』になると様子が変わってくる。彼は瞑想的生活を希求し、家庭生活の理想と国家への奉職を拒否するのである。実際に彼の願いが実現されることはほとんどなかったが、ここに全員一致の気風の弛緩を読み取ることができよう。同一家系に属するこの二人の相違について、著者は世代の違いを強調する。すなわち、間断のない戦争の時代に成長し、人文主義を完成させた第二世代をはさんでの、イタリア

本土への拡張の初期段階を目撃し、将来への期待をもった快活な第一世代と、本土への拡張が止み、オスマン・トルコの脅威が増大してきた気の重い守勢の時代にある重苦しい第三世代との断絶であり、基礎にある社会意識や学問世界が変化したのである。それぞれの世代の特色をひとつの著作で代表させること、また両者の相違を単に世代の違いとしてのみ捉えることに幾分の躊躇を覚えるが、同一家系に属する二人の著作を例にとり、学問上の特色を社会の変化や貴族階級の意識と関連づける点は興味深い。

第三章「カンブレー同盟戦争と貴族階級の意識—ガスパロ・コンタリーニの思想」では、一六世紀初頭のヴェネツィアにおける政治意識の覚醒について論じられ、その背景には一五〇九年からのカンブレー同盟戦争の危機があったことが指摘されている。ヨーロッパ諸国を敵にまわしての戦争という過酷な状況を何とか切り抜けたヴェネツィアでは、社会全般にわたる反省がなされる一方、自らを理想化し、自己礼賛することによって国家の威信を回復しようとする傾向が顕著に現れてきたのである。その典型として、ここではガスパロ・コンタリーニの思想が取りあげられる。彼は、瞑想的生活を避けて行動的生活を選択し、『ヴェネツィアの行政官と共和国』において、ヴェネツィアの諸制度の素晴らしさを強調するとともに、こうした制度を生み出した精神の働きに目を向ける。しかしながら、コンタリーニの思想は、その保守性と理想主義的性格から、いかなる変化をも拒否し、歴史感覚が決定的に欠けているのであって、それがひとつの大きな限界となっているのである。このように、対外的な危機によってヴェネツィアの思想や文化の方向性が規定されるという立場は、本書を貫く大きな柱となっている。

歴史感覚の欠如が指摘されたガスパロ・コンタリーニと異なり、独特な歴史観を持っていたのが、第四章「一貴族の苦渋—マリン・サヌートの『日記』と政治生活の挫折—」で取り上げられているマリン・サヌートである。彼は、事実の正確さを無視して道徳的指針を重視する人文主義の歴史記述とは異なり、事件の因果関係や人物・場所を正確に記録することが重要であるとして、五八巻におよぶ『日記』を残し、身の回りのささいな出来事から、世界史的な事件にいたるまでを詳細に記述している。この『日記』は、サヌート自身の偏見を含んだ記述があったり、ヴェネツィア共和国に不利な事柄について触れていないなどの限界はあるものの、史料としての価値は特筆すべきものがある。そして、この重要性については、すでに同時代人も気づいていたのである。一五二九年、ピエトロ・ベンボの史官就任に際して、サヌートは『日記』の借用を要求され、いやいやながらもこれに応じている。ベンボが『日記』の借用を求めたことは、人文主義の歴史記述が修辞的なものから一歩抜け出そうとしている現れだと捉える著者は、サヌートの『日記』に対し、実用主義的歴史記述への転換点に位置するとの評価を与えるのである。

第五章「反逆の文化と貴族階級—一五三〇～六〇年の社会と文化—」では、非貴族で、しかもヴェネツィア出身でもなかった、「ペンの冒険家」とよばれる著作家たちの活躍が取り上げられている。まず著者は、一五三〇～一五六〇年の時期は、ヴェネツィア共和国にとってひとつの時代を画しており、それは「安堵の時代」と「不協和音の時代」であったと位置づける。すなわち、カ

ンブレー同盟戦争とそれに続く危機的状況からようやく脱し、政治的な安定や経済の回復がみられるようになると、ただひたすら安定と調和を求め、維持しようとする保守主義の時代であったと同時に、貧富の差が拡大し、市民・庶民階級の不満が鬱積して、貴族階級に対する批判がみられ、両階級間の緊張が高まった時代であったのである。このような時代にあって、ピエトロ・アレティーノに代表される「ペンの冒険家」たちは、ヴェネツィアにおける印刷業の発展を背景に活躍し、現状に対する批判から、ヨーロッパ各地の権力者たちを痛烈に風刺し、攻撃した。しかしながら、彼らは単に攻撃するだけで、その対象に何ら分析を加えていないこと、また何よりも、ヴェネツィア共和国とその支配者たる貴族階級には攻撃の矛先を向けていないことに注目すべきである。彼らは、支配者層と非支配者層とを結ぶ共通項の役割を果し、支配階級に市民・庶民階級の不満を伝えるとともに、非支配階級には不満のはけ口を与え、両者の決定的な衝突を回避して、この時代のヴェネツィアの安定に貢献したのである。著者のこの解釈は大変興味深いが、ただ「ペンの冒険家」と貴族階級とのかかわりが具体的に示されているとはいえず、その点多少の不満が残るといえよう。

第四章でみたように、サヌートの『日記』はヴェネツィア歴史記述の転換点に位置していたのだが、その後の歴史記述の展開を扱ったのが、第六章「ヴェネツィア歴史記述の展開と貴族階級の危機」である。カンブレー同盟戦争以後、ヴェネツィアの公式の歴史を記述する史官には、ヴェネツィア貴族のみが就任することになったが、実用的な歴史記述が求められていたにもかかわらず、旧式の基準によって史官が任命されたため、その歴史記述は従来の愛国的記述の域を出ることができなかった。しかし、一六世紀後半に入ると、歴史記述は大きな展開をみせ、現実主義的・発展的思考が増大してくることになる。たとえば、一五八〇年に史官に就任したパオロ・パルータは、歴史研究の倫理的価値よりも政治的価値を強調し、事実について独特の解釈を加えるとともに、商業の役割を重視して、歴史における経済的要因に配慮しているのである。では、なぜこの時期に、このような歴史記述の大きな展開がみられたのか。それは、ヴェネツィア貴族をとりまく環境が変わったためであり、歴史記述の展開は貴族階級の危機と表裏をなすというのが著者の主張である。地中海貿易の回復や国内産業の繁栄に積極的に関与せず、本土の土地所有を拡大していた貴族階級は、その内部に「老人派」と「青年派」の対立を抱えていた。それは、世代間の対立であり、また政治的権力を独占している貴族と上昇を望む貴族との、共和国の進路をめぐる争いでもあった。パルータは、いわば「青年派」のスポークスマンであったが、その主張は両者の積極性と消極性とを折衷したものとなっていたのである。

第七章「ヴェネツィア貴族階級の衰退」では、ヴェネツィア貴族階級の性格の変化と衰退について論じられている。一五世紀以降、ヴェネツィア貴族は、共和国の本土進出に伴って地主化する傾向を示し、貴族と商人との概念の分化が生じていた。また、貴族階級内部において、富裕貴族と貧困貴族、「旧い家系」と「新しい家系」、「老人派」と「青年派」といった対立関係が重層的に存在していたのであり、前章でみたように、一六世紀後半には、

貴族階級は一種の危機的状況にあったのである。貴族階級についてのこのような状況をふまえたうえで、著者はデーヴィスの説を検討する。デーヴィスは、ヴェネツィア貴族階級における貧困貴族の増大と貴族人口の減少に注目しているが、貧困貴族の増大がそのまま貴族階級全体の貧困化につながるという点については、著者によって批判が加えられている。著者が取り上げるのは、貴族人口の減少が人材の不足を招き、ひいては貴族階級の衰退へとつながったという点である。しかも一六四五年以降新しい貴族家系が誕生したにもかかわらず、それは貴族階級の活性化をもたらさなかったのであり、また市民階級にしても、質量両面において貴族階級に替わる存在とはなりえなかったのである。では「衰退」した後のヴェネツィア貴族のあり方はどのようなものであったのか。また一七・一八世紀には、ヴェネツィア共和国自体の性格にも、周囲の経済情勢が大きく変わっていくなかで、何らかの変化が生じていると思われるが、そのような変化と貴族階級の変質はどのように関連していたのであろうか。こうした点についてさらに著者の見解を求めるのは、欲ばり過ぎかもしれないが、しかし、貴族階級をヴェネツィア共和国の中核と位置づけ、研究を続けてこられた著者だけに、その考えをぜひうかがってみたい、というのもまた、正直な感想である。

最後に、本書に付された年表について一言触れておきたい。この年表は、本書で扱った時代、すなわち一三世紀末からオーストリアへの併合後の一九世紀初頭までの事柄が、極めて詳細に記されており、しかも政治・外交に関する事件ばかりでなく、ヴェネツィアでの生活や文化に関連した、異常気象やペストの流行、建築物や絵画の完成といった事柄も豊富に収められている。ヴェネツィア史についての史料は、日本では決して多いとはいえないなかで、この年表から得るものは多く、著者に敬意を表するしだいである。

三

以上、各章ごとにその概要を紹介した。そこで今度は、本書全体を見渡し、今少しその内容に立ち入って若干の感想を述べてみることにしたい。

本書の魅力の一つは、冒頭部で述べたような切り口による、その深遠な対象世界であることはいうまでもないが、今一つの魅力は、その論理展開の術であり、結論に至るまでの手続きの妙味である。他の多くの研究書では、あるテーマに対し、いくつかの類似の材料を一つの決まった方向からただひたすら分析するといったスタイルがしばしば見られ、それはそれで説得力のある堅実な成果と評価できるであろうが、しかし時として単調に陥りやすく、正直なところ退屈することも少なくない。それに対して本書は、一つの対象をただ一方向から分析し解釈するだけでは終わらない。正の要素の裏には必ず負の要素が隠されている。つまり、試みた分析に伴う解釈がはたして十分なのかどうかを批判的に受けとめ、別の方向から見るとそれがどう違った像になるのかを見極めるべく、もう一度問題を立て直し、検証していくのである。したがって読者は、まとまった一つの分析結果から導かれるであろう結論をそのつど保留され、結局、最後に至ってドンデン返しを食らわされることになるのである。特に第五章の後半部分において、非

ヴェネツィア人であるところの「ペンの冒険家」たちが問題とされるが、彼らの作品が貴族と平民の間でいかなる役割を果たしたかの解釈をめぐる議論はその好例であろう。

しかし、かかる著者の構想力と巧みな筆致に酔い痴れながらも、一方でその間隙を縫うように、いくつか疑問を感じた点があることも否めない。

まず本書の柱をなす「貴族階級」について、とりわけ第一章で述べられている「貴族階級の確立」という表現、およびその場合の「貴族階級」なる言葉についてである。ここでは著者は、それまで市民階級を取り込んできた「貴族階級」がある時点をもって閉鎖化し、もはや市民を受け入れない閉ざされたカーストとなる、その時点を「貴族階級の確立」と捉えている。その論理は明快であり、著者の意図は十分に理解できる。しかし単純に考えて、「貴族階級の確立」を議論する場合、「未確立」から「確立」への一つの変化を問題とするわけであるから、その手続きとしてはやはり、主体となる「貴族階級」なるものの概念規定をしなければならないのではないかと思われる。しかし「貴族階級」の何たるかを論じることを目的とはしないという本書の前提からか、著者は概念規定なしに、というよりは概念規定の必要性を感じずに「貴族階級」という言葉を、その「確立」の以前にも以後にも同じように用いているのである。ここに一つの混乱が生じる。この混乱は「貴族階級」の変化に留意していない言葉の使い方のみならず、「貴族階級の確立」という言い方にも起因していると考えられる。著者の主張に沿うならば、ここでいう「貴族階級の確立」とは、もはや市民階級を取り込まなくなったということで「貴族階級の固定化」、或いは「貴族階級の閉鎖性の確立」という意味であり、それならそう言い換えた方が事態をより正確に把握できるであろう。いずれにしても「貴族階級」「貴族階級の確立」という表現を著者がどのような意味で用いているのかを十分に理解しないと、前後関係において多少の混乱と誤解を招きかねないように思われる。

次に貴族階級の内部に目を向けてみよう。著者によれば、ヴェネツィアにおいては社会階級の相互の関係が比較的安定し、いわゆる階級闘争なるものが起こらなかったことが一つの特徴であったが、貴族階級に限っていえば、一見等質性を具えているように見えるものの、それは、一致団結して理想を追求し国家に奉仕する均質的な団体ではなく、さまざまな利害関係を抱えた雑多なグループの集団であり、しかも対立する利害をもった党派に分裂していたのである。このことは、第一章をはじめ、第六章、第七章において、「旧い家系」と「新しい家系」、有力家系と多くの有力でない家系、「老人派」と「青年派」、富裕貴族と貧困貴族といった形で、貴族間の対抗図式の具体的なありようについて展開されている通りである。そして、有力家系かつ富裕貴族を形成していたのが「旧い家系」と「新しい家系」、老人派＝富裕貴族、青年派＝貧困貴族という相互の関係も説明されている。しかし一四、一五世紀から一七世紀に至るまで、こうした対抗図式を固定してしまうことはたして可能であろうか。これら二項対立の関係のなかで流動性はなかったのであろうか。ペストや戦争、飢饉や天災などで貴族の経済環境も随時変化したであろうし、時として富裕貴族が貧困化してしまうこともありえたはずである。世代によ

る変化も考えられる。そうした場合の流動性を対抗図式に重ねるとどう説明されるのであろうか。それとも、それらは単に大勢に影響しない例外のいくつかとして位置づけられるのであろうか。また、さまざまな局面で展開したであろうこれらの対立が、概ね破局に至らなかったのはなぜであろうか。著者は、一四世紀半ばの段階ですでに特定の貴族だけが富や政治的影響力を独占していた可能性があることを指摘し、それでも圧迫された貴族が市民階級と同調して主流の貴族グループと争うことがなかったと述べている。その場合、主に官職上の巧みな救済策のおかげで対立が破局に至らなかったことは一つの理由として理解できるが、ヴェネツィア史を貫く伝統としてあった「対立」を「安定」させるメカニズムをもう少し掘り下げて解明してほしかったようにも思われる。或いは、そのメカニズムを本書特有の切り口である思想の領域に求めることが可能だとすれば、どのような説明になったであろうか。思想ということでいうなら、著者は貴族階級の意識を一括りにしてその変遷を分析し浮き彫りにしているが、著者が随所で繰り返し強調するような「不均一な」貴族がはたして「均一な」思想・意識を共有しえたのであろうか。本書でヴェネツィア貴族階級の思想や歴史意識として議論・検討されているのは特定の人物群についてのみであり、それらをもって一枚岩ではない貴族を代表させていいものかどうかという点にもやや躊躇を覚える。この点にこだわるのは、こうした議論が本書の関心の底流をなす「人文主義歴史観から近代的歴史観への展開」という大きな問題の取り扱いに関わってくることでもあろうと思うからである。

最後に、貴族階級の確立から変質・衰退まで、その存在と不可分に絡み合う市民階級の動静・意識について、さらに分析を求めるというのは欲深いことであろうか。貴族階級の確立に際して、市民階級を排除することによって現状を維持し、自己の安全を確保しようとした貴族階級の意識に対して、市民階級の意識はどのようなものであったのか。党派に分裂し、利害対立している貴族階級に対して市民階級はそれぞれどのように接したのか。また、市民階級は結婚を通して貴族階級と結びつくことも少なくはなく、社会的に手厚く保護されると同時に貴族階級と手を携えて国政に関わったとされるが、貴族階級が旧式のメンタリティーをもつ保守的で傲慢な集団になっていった一六世紀において、国際的な感覚をもって登場したという彼ら市民階級の意識と行動はいかなるものであったのか。本書の考察対象が貴族階級に限定されていることは重々承知しているが、市民階級についての考察がさらに徹底すれば、より一層、貴族階級のありようを浮き立たせることができたようにも思われるが、如何であろう。

四

本稿は、一九九四年六月に行われた本書の合評会において評者二人がコメントした内容をベースに新たに作成したものであるが、細かすぎると思われるコメントはある程度省略した。評者二人は、片やドイツ中・近世の都市史を模索する者、片や近世イタリア史の道を歩み始めたばかりの大学院生であり、いずれも本書を論評するにふさわしい専門家とはいえず、ここでは素人としての考えをただ書き連ねたにすぎない。とりわけ、本書の土台をなす思想史・文化史の世界に分け入って論評することは到底できなかった。

したがって書評の責を塞ぎえたかどうか誠に心許なく、また誤読・誤解や的はずれの批評については著者の御海容を乞う次第である。最後になったが、わが国における本格的なヴェネツィア史の研究書の完成を慶ぶとともに、古稀を迎えられた著者のますます明晰な頭脳に心から敬意を表したい。

（A5判　一四＋三三八頁　一九九四年二月　刀水書房　八二四〇円）

（田中俊之　京都大学大学院博士後期課程　[redacted]）

（藤内哲也　京都大学大学院修士課程　[redacted]）